

2018年度 Sセメスター

総合B系列 現代文化人類学 (教員：津田浩司)

目次

1、文化人類学とフィールドワーク

ーフィールドワークの誕生と Writing Culture Shockー

2、Writing Culture Shock を受けたフィールドワークの展開

3、映像資料『アナ・ボトル』について

4、文化人類学的フィールドワークとは

この授業では試験は行われず最終レポートが課される。そのため、このプリントは試験対策というよりも授業展開を再確認するという用途を意識して作られている。また、このプリントにおいては、図表を用いた整理はほとんどなく主に文章によって展開している。授業内容が高度なことも相まって理解に苦しむ箇所もあるかもしれないが、そこは踏ん張って読んでもらいたいと思う。

少しでも皆様の役に立つことを願っている。

文化人類学とフィールドワークーフィールドワークの誕生と Writing Culture Shockー

1、フィールドワークとは何か

野外調査、現地調査、実地調査

(⇔机上の作業、既存文献・データを基にした作業、限定性・統制性の強い実験)

→自らの感覚を通して全体・ありのままを捉えようとする手法

何かが生起する場に身を置き、データを集め、知見を得、思考を鍛える

2、文化人類学とは何か

社会学との対比の観点から見る

19世紀末 文化人類学：未開 ⇔ 社会学：文明

現在 文化人類学：質的(インテンシブ) ⇔ 社会学：量的(エクステンシブ)

3、文化人類学とフィールドワーク

「文化人類学とフィールドワークは不可分な存在である」(現在では様々な学問分野で採用)

エスノグラフィー(民族誌)…民族についての記述(民族以外が対象にもなる)

→人の営みが関わる対象に直接参与しデータ得て総体的に記述する

「エスノグラフィーとフィールドワークは同時に存在するものである」

注意すべきは、フィールドワークにも前提となる思索・調査は不可欠だということである

それらを基にフィールドに行き新たな知見・概念を得て調査を再試行したフィールドに出る

「フィールドワークとは思索・調査とフィールドとの永続的な往復である」

4、文化人類学の誕生

例) 『ニュルンベルク年代記』

中世西欧の人文的学術書だが、「自分たち」とは全く異質な民族に対する想像に富んだ記述

大航海時代以降、冒険者・商人・宣教師たちは世界に繰り出すようになり、「自分たち」の想像が想像に過ぎなかったことを悟る一方で、「自分たち」とは異質な民族の異様とも思える風習・慣習に興味を持つようになった。この中で西欧の貴族たちは、国外に眠る「珍品」の収集に精を注ぐようになり、彼らへの出資を行った。この動きは「新大陸」発見以降さらに強まり、「珍品」の収集が増えると貴族たちはそれらの整理を要し、その動きの中で民族学博物館が建てられた。

このようにして体系化してゆく文化人類学であるが、異質な民族の異様とも思える風習・慣習への興味・情報収集は、西欧列強の植民地拡大・植民地の効率的統治とは不可分であった。むしろそれらを前提とした上での文化人類学の体系化だったとも言える。またこれらの興味は、必ずしも国外にのみ向けられたわけではなく、国内にも向けられた。「国民国家」と呼ばれる概念が定着する19世紀以降になるとこの動きはさらに強まり、国内の均質化という形で展開していった。しかし、20世紀後半になると、この均質化の中で失われてゆく「何か」に対する愛着・執着という形で興味が強まり、その中で伝統・文化という概念が生じ始めた。

5、文化人類学的フィールドワーク

研究者は、長期滞在をしながら現地の生活に溶け込み、現地の人々と親密な信頼関係(ラポール)を構築し、現地の人々やインフォーマントの言動や話を記録する(参与観察)

cf. アンケート…研究者側の概念が入り込んだ質問を回答者に突拍子もなく尋ね回答者が意識的に質問内容について考え回答する

アンケートとは対照的なフィールドワークという手法…収集資料と分析概念との往復

6、フィールドワークの導入による文化人類学の変化

A フィールドワーク導入以前

例) フレイザーの『金枝篇』

未開社会の精霊信仰、「王殺し」による世界更新の考え、類感呪術、感染呪術、神話分類などについて、博物学的収集による二次資料に基づきながら表面的類似性に着目して体系化している

→ある事象の社会・文化内における意味や内的連環については明らかにならない

→同文化圏説、文化伝播説、西洋模倣説などに基づいた考え方は、「安楽椅子の人類学」として批判の対象となる(特に西洋模倣説については社会進化論的思考も含んでいたため)

B フィールドワークの導入

20世紀初頭のイギリス人類学では、机上の理論だけでは満足せずデータ収集のため調査を実施「トレス海峡調査隊(総合広域調査)」

→集団調査の対照的な形として限定地域での「重点的研究」の必要性を認識

C リヴァーズの構想

現地言語の取得、現地の人々の自発的な語り、具体事例の研究、満遍のない情報収集

→調査者一人の、小規模コミュニティでの、生活文化の事柄についての、現地語を介した、具体的かつ詳細な研究を理想とした

cf. 「一人」への固執

あくまで総合広域調査へのアンチテーゼとしての文脈での主張であるから、一概に徹底的なものとは言えず、むしろ現在では「共同調査」の形も多いため、固執する必要はない。

D マリノフスキによるフィールドワークの提唱

現地調査旅行が第一次世界大戦により長引き長期滞在が偶然的に実現した。著書『西太平洋の遠洋航海者』にあるように、現地における「クラ交換」においては、クラの来歴の過程がクラの価値判断に大きく関わり、返礼という形での長期的なやりとりが島々の関係性の持続に大きく寄与している、ということを見出した。つまり、「クラ交換」は、経済的な意味以上に、島々の間での社会秩序の形成・維持、社会制度との結びつきという大きな意味を持っていた。ここから、マリノフスキは、文化は互いに関係して働く諸要素の集合体であるという機能主義を唱え、これは当時の文化人類学においては画期的な考えとなった。重要なのは、マリノフスキが現在のフィールドワークにつながるような調査を行ったことによって、「クラ交換」の実質的な意味を見つけ、機能主義という考え方に至った、ということである。(従来の「安楽椅子」からの脱却)

注) 現在では機能主義も批判対象→機能を重視する余り機能完結的、人間存在を無視しうる懸念

7、エスノグラフィを書くこと

A エスノグラフィ…「異民族」「異文化」「他者」を対象にした記述

→「異○○」「他者」を考えるならば、まずは書き手である「自己」を考え関係論的に探る

当時の書き手は、欧米の大学の中流白人の男性研究者が主流（読み手もまた同様）

文化人類学は非欧米地域（「未開」）を、社会学は欧米内の副流（「マイノリティ」）を扱った。また、「真理」の存在を前提とし、「事実」の「客観的」記述・主観のない価値中立的な観察分析を行うことを目指す実証主義が根底に存在した。

時代が下り、アジア・アフリカ諸国の独立が進む中で、被調査側から一方的な調査に対する異議申立てが行われるようになると、研究者倫理の反省・被研究者立場の再考が始まった。

そもそも、文化人類学は、西洋の研究者が「未開」を一方向的に調査しそれを記述するという形で始まったものである。これらの調査・研究の前提には、科学と理性による人間社会の真理の追究を目指す実証主義・啓蒙主義が存在した。しかし、時代が下り、ポストモダン思想の中でニーチェやマルクス、フロイトが述べたように、そのような実証主義・啓蒙主義に対する懐疑が進んだ。具体的には、絶対概念・普遍概念に対する懐疑、「全体性」への懐疑、そして「知識」と呼ばれるものの断片性・文脈依存性である。このようなポストモダン思想の展開の中で、文化人類学を大きく揺るがすようなある書物が出版された。

B 『Writing Culture』

この本の表紙にある一枚の写真が衝撃を与えた

i 被調査者の調査者への意識…少なくともリヴァーズの構想からは離れている

ii 人類学者による「書く」という行為

→「書く」時点で創作であるという詩的問題、「書く」者と「書かれる」者との不平等性の問題
すなわち、人類学者(研究者、書き手)と被調査者の間には以下のような問題がつきまとう

イ 人類学者による、意図する意図しないに関わらない、取捨選択

ロ 人類学者の「書く」という行為における作品性(言語制約の観点も含む)

ハ 人類学者と被調査者との間の政治性(非対称的権力性、所詮分析主体は人類学者にある)

ニ 文化人類学の西洋性(西洋前提に対する不信)

ホ エスノグラフィにおける人類学者への依存性(人類学者自身の背景が大きく影響)

へ 民族誌で書かれた事実は部分的でしかない(限定性を帯びている)

→「真実」は、人類学者のある種主観的な取捨選択のもとに成り立つ部分的なものに過ぎない

『Writing Culture』は、人類学者が「ものを書く」ことに対する radical な警鐘を鳴らした

これを俗に「Writing Culture Shock」という

8、「Writing Culture Shock」を経た文化人類学者の展望

極論を言えば、人類学者たちは何も「ものを書く」ことができなくなる

一方で、positive な見方から新たな展望を見出せる、むしろ展望を見出さなくてはならない

←「ものを書く」ことをいない人類学者は誰もいない

新たな展望…「ものを書く」行為は各々の人類学者によるものであるから、エスノグラフィに書

かれたことを全面的・絶対的に「真実」とするのは誤りだとしても、それが部分的

には「真実」であることには変わらない。むしろ、各々の人類学者によって独自に

切り取られたある切り口・ある観点として評価してゆこうとする姿勢につながる。

→ものの見方・社会を見る目の多様性を認識するという観点から新たな展望を見出した

Writing Culture Shock を受けたフィールドワークの展開

Writing Culture Shock において、「エスノグラフィは客観的、絶対的、全体的「真理」ではなく、ある特定の視点から書かれた「部分的真実」である」ということが指摘された。これに対し、社会科学的立場からは、より一層科学性を追究しようという意見が多かった一方、人文学的立場からは、上の指摘に対応してゆこうという意見が多かった。以下ではその対応例を見てゆこう。

『現代エスノグラフィー、新しいフィールドワークの理論と実践』に基づいた対応例

1、アクティヴ・インタビュー

(従来)

中立性重視のインタビュー

→回答者は頭の中に純粋な「情報」を持ち質問に反応するだけの機械的・受動的な存在

質問者は機械的に質問し「情報」を受け取る中立な存在 という前提

(アクティヴ・インタビュー)

インタビューは本来、情報の単なる受け渡しの場ではなく、質問者と回答者の相互に能動的・主体的なプロセスである。(ジェームズ＝ホルスタインはこれを「演劇」と言った)

→回答者はインフォーマントを超えて自身の経験の意味を文脈に応じて能動的に組み立て

質問者はインフォメーションを額面通り受けず能動的に「情報」を構築する とされた

⇒dynamic なやり取りが重要視された

注) 複数の回答が生じて、どちらが「真理」かを追求するという姿勢ではない、むしろそれらの回答がそれぞれいかなる文脈・背景(context)においてなされたのかを意識する姿勢である

(残る問題)

回答者と質問者の協働という特定の文脈における語りの解釈が主体になる

i 協働は真に達成できているか(権力性の問題)

ii 語りの解釈はもちろん、語られなかった部分への意識は向けられているか

2、調査者の対応

A フェミニストエスノグラフィ

女性の経験に女性の視点を当てるのが目的

しかし、固定的ジェンダーをなぞったに過ぎない手法、「女性」の position への意識の重要性

B ネイティブエスノグラフィ

non-native と native の二項対立の打破が目的

しかし、native と non-native の線引きに関わる問題、native の非特権性・細かな多様性

C 当事者研究

セルフヘルプ(経験の語りの中で問題解決を目指す)をもとにした手法、アカデミック性は薄い

しかし、「当事者」は自己による定義次第であり誰でもなれる、当事者の位置付けの重要性

⇒全体として、調査者の positionarity への意識が強い分、被調査者の語りが薄くなる

3、アクション・リサーチ

調査のための調査・「知」の抽出のための調査に対するアンチテーゼ

理論と実践の乖離を抑える目的、調査を通し現場の問題を解決するため調査者が action を実行
action を通じ知識・理論が産出される過程を重視

⇒調査「対象」とされてきた人々が、対象ではなく調査「共同者」として、共に主体的に関わる
ことで、論理と実践の関わり合いの中で、現場の変革を目指してゆく

(残る問題)

対話・協働の形成・継続の困難に直面

目的先行の調査が害悪を生むケースは少なくない(最悪の場合「知」の創出の根幹に関わる)

4、チーム・エスノグラフィ

単独調査者モデルにおける特定個人への一辺倒の抑制として、複数の者がフィールドワークに
携わるアプローチ、チームを組む相手は研究者(同分野・異分野・在野)、専門家、調査協力者等
多角的視点・視座を取り入れることで複層的な捉え方を行い自己再帰する、多声性にも配慮する
→チームにおける調査者自身の positionality の問題に反省的でもある

しかし、メンバーの知見を整理・表現するのは困難、かつ多声性は具体性・即時性が要求される
場合は否定的にとられる(ただこの姿勢自体正しいかどうかは不明)

5、ライフストーリー、オートエスノグラフィ

A ライフストーリー

個人の生全体への接近(社会学的な属性分類に対するアンチテーゼ)

cf. ライフヒストリー…公的な年表に落とし込む形での個人の「歴史」

重要なのは、目の前にいる個人がどんな経験をし、その経験をその個人がどのように解釈し、そ
の個人を通して社会・文化がどのように見えているのか、ということに接近すること

そこに、社会・文化を作り変えてゆく人間の創造的契機の可能性を見ることが出来る

「語る・聴く」という行為(how)と語られたことの解釈分析(what)は一体的、両者の均衡が課題

B オートエスノグラフィ

調査者が自らの主観的経験を表現し再帰的に考察する

自己の立場を再帰するとともに、自己の感情・主観を重視している(⇔主観排除の社会学)

→表現法の拡張、共感・共鳴の要求→「わかる」ということへの再認識

しかし、どのように評価するか

6、オーディエンス・エスノグラフィ

(対立項)

A テキスト分析(人文学)

メディアの内容そのものをテキストとみなし分析する

⇔実際の視聴者がどれほど能動的にメディアを解釈しているかを意識していない

B 利用と満足研究(社会科学)

人々がどのようにメディアを利用しどう満足を得るか量的調査・統計分析する

⇔視聴者の多様な解釈・自由な主体性を前提とし社会的文脈が考慮されていない

(主題)

メディアを利用する人々の背後にある context を重視し人々のメディア利用・解釈・意味について現場で調査する手法

(残る問題)

長期調査・広範調査が不可欠だが困難

発信者と受信者が可変的・流動的な中で「オーディエンス」の定義が揺らぐ

7、マルチサイトッド・エスノグラフィ

社会学→国民国家の枠組み 文化人類学→地理的空間という枠組み

グローバル化の進む現在「国」という枠組みは消滅しつつある

→複数の現場を横断しながら参与観察を行う

グローバル化の影響がローカルの現場ごとにどう異なって現れているかもわかる

⇔現実的に困難、かつ複雑性を増す中で対象とする現場を選定するのは困難

以上のような手法は、各々問題を抱えつつも、Writing Culture Shock で表出した特定の問題に意識的であり、一つの物の見方として捉えるべきである

映像資料『アナ・ボトル』について

1、現代のフィールドワークに対するアプローチ(まとめ)

フィールドワークは抽象的・客観的なものではなく、特定の文脈(5W1Hとも言うべきもの)を意識して行われるべきものである。ただ、特筆すべき点が2つある。1つは、Whenをあえて記述しないことであるが、これは「時間がある種の整理・客観視を生じさせ得ること、さらにはそれが取捨選択までも生じさせ得ることへの危惧から生じる、フィールドワークが常に今・現在に行われているという意識」の裏返しである。もう1つは、Whereの記述が少ないことであるが、これもまた、場所への強い意識の裏返しである。様々なアプローチを見てきたが、重要なことは、分類・モデル化されたアプローチにおいて何が意識され何が捨象されているのかを常に認識することに他ならない。

ただ、このような姿勢、すなわち Writing Culture Shock以降の反省的態度は、人類学におけるフィールドワークというアプローチの技術的側面ばかりへの意識に繋がり、結果その対象・内容への意識が薄くなってしまった。

2、『アナ・ポトル』の所感から再考する(コメント紹介と教員の意見)

A 「ラポールというものの実感が湧いた」

調査者と被調査者との信頼関係

局所的なものではなく一連のコンテキストの中にあるもの

撮影に対する被調査者の意識が被調査者の「自然」を損ねたとする悪しき客観主義への疑念

全ては困難でも「ある」側面を切り出し生の全体性に接近しようとする点で評価し得るもの

cf. ナレーション

ナレーションだけを聞くと機能主義的な響き

(機能主義は極論文化の違いを理由に「私」と「あなた」を分ける文化相対主義の負の側面に至る)

しかし映像があり視聴者に任されている、映像資料である以上ナレーションの言葉は少ない

cf-2. 映像の編集

もともと 60 分テープ 30 本分の映像でそれを 43 分にまとめているため、主観性は入っている

しかし重要なのは、主観が入ることが良くないわけではないこと

ありのまま、「自然」を捉えることが重要とする姿勢、すなわち悪しき客観主義には否定的

B 「南国の人は気性が陽気なことが多い」

「陽気」というのは思い込みであり、現代人類学では否定的(マリノフスキ的である)

C 「生々しく」

これを客観主義の文脈で使うのならそれは否定的

個々のコンテキストの中で生きるもの、「文化」という枠組みで捉えるのではない

D 「市場経済と慣習経済」

あえて映像では、市場経済と慣習経済の両方の中に生きる人々として切り出しており、その二つの経済の正否を言っているものではない(ただし対象選定の時点である程度の方向性はある)

何にも目を向けず無視する態度はニュートラルとは言えないし、何かに目を向ける時点で既に政治的である、そうであっても物事に関心を向けることそのものが始まりである

文化人類学的フィールドワークとは

ここからは、方法論的な話をやめてフィールドワークの中身についての話をしよう。

1、フィールドワーク・ブーム

1970年代後半以降、社会科学全般でフィールドワークを用いた質的社会調査研究法が積極的に導入された。これは近代科学の極端な客観主義・実証主義に対する懐疑に起因する。一方、その頃の人類学は、むしろ「Writing Culture Shock」によりフィールドワークへの反省的態度が生じ始めていたのだが。

社会科学の他分野では、ブームに合わせて数多くのフィールドワーク方法論なるものが提唱された。その一方で、人類学ではほとんど提唱されなかった。しかし、ブームによりフィールドワークが各所へ「拡散」されるようになると、フィールドワークの定義が不可能な事態に陥った。

そこで、人類学的なフィールドワークとはそもそも何かを再議論するようになった。

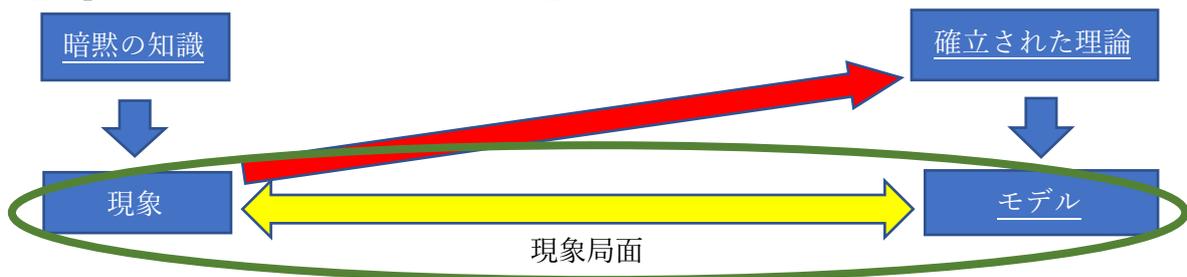
2、3つの軸から考える人類学的フィールドワーク

マリノフスキによれば、長期の現地滞在・現地言語の取得・ラポールの確立・現地員としての許容の4点が人類学的フィールドワークには要請されており、これは全体的文脈を踏まえた全体論である。全体論であるならば、自ずと長期にわたって現地に住み込み現地の人々の生活の中に身をおくという姿勢はうなずけよう。ただし、人類学的なフィールドワークの形はこのようなintensiveな形しかないのか？extensiveな形もありえよう。

1つ目の軸を見てみよう。「聞く」と「見る」、聞き取りと参与観察である。聞き取りと言っても様々な形が存在する。もし構造化した聞き取りであれば、それでは事前に質問内容を予め考えておくだらうし、非構造化した聞き取りであれば、それではある種の日常会話的な聞き取りを意図しており大枠すら設定されないだろう。むろん、半構造化した聞き取りもあって、それでは大枠は定めておくもののその中での展開は調査者と被調査者のコンテキストに任されている。一方の参与観察では、実際にその場で実感・体験・観察する。今挙げた2つは主要だから挙げたのであって、方法はこれらだけに限らない、むしろ他の手法を用いることも多い。ここから見える人類学の姿勢として、ある現象に関する研究において適宜妥当な方法を組み合わせることで研究を進めてゆこうとする人類学のハイブリッド性が見える。これは、常に現場・コンテキストを重んじる姿勢と相違ない。姿勢というと自由な響きを含むが、厳しく言えば、人類学という学問では、ある意味、個別領域の特化した社会科学とは異なり、複数のアプローチに対してコンテキストに応じつつ開放的・柔軟的にあることが要請されている。

2つ目の軸を見てみよう。「量的・定量的」と「質的・定性的」である。「量的」研究とは、実証主義的・自然科学的な、理論を枠組みとして一般化を行い、簡潔かつ客観中立を目指す研究のことである。データの収集と分析は互いに独立し、etic(外部からの観察)に進行する。一方、「質的」研究とは、解釈主義的・解釈記述的な、データを優先しながら文脈を重視し、研究者と被研究者の親密性を確保しつつ濃密な記述を目指す研究のことである。データの収集と分析は互いに連関し、emic(内部からの観察)に進行する。このような形式的区分において、限定的に人類学を分類するのであれば、それは後者に属すると言える。しかし、そもそもこの区分自体が対立性を帯びたものではなく、至って形式的であるということは留意しなければならない。

3つ目の軸を見てみよう。「仮説検証」と「仮説生成」である。「仮説検証」とは既存の仮説に対し研究を行うもので、そこで問われるのは既存仮説の成否である。一方、「仮説生成」とは対象と向き合う中でそれを最もよく説明する仮説を設定してゆくものである。ここで、この「仮説生成」について、以下の図を用いることで理解をより深めたい。



前頁の図において、青矢印は Deduction、黄矢印は Induction、赤矢印は Abduction を表している。Deduction においては既存の理論を、Induction においては量的データを基にすることが多い。その一方で人類学があてはまるとされる Abduction は、決して多くないデータへの徹底的な質的研究をもとにそこに最適な仮説をおこうとするものであり、これにおいては現象の徹底的な研究・飛躍先の理論に対する理解・研究者のコンテキストに基づく柔軟な思考力や直感力など、総合的な能力が要請されている。もちろんこのある種対立的に見える二概念も決して対立的ではないことは先にも述べているが、例えば、仮説というものの定義から再考するだけでも新たな軸を想定することは可能である。今ここにおける仮説とは、「すでにわかっていることを土台にしまだわかっていないことを明らかにするために見通しとして置く仮の答え」であるが、これの幅を変えてみるだけでもまた違う説明が可能となる。

以上3つの軸を見てみたが、ここに挙げた3つの軸の意味を考え直せば、フィールドワークというものを「説明」するにあたってより分かりやすい基準を設けるためであったので、重要なのは、この3つの軸が必ずしも人類学を系統的にかつ対立概念を備えた形で説明しうるものではないということである。結局のところ人類学において要請されるのは、調査者・被調査者のコンテキストに寄り添いつつ調査者が柔軟にかつ即時的に多様なアプローチを行ってゆくおことであり、総括的に人類学的フィールドワークがどういうものかを限定することは困難である。

3、フィールドワークの認識論

- i 見ること(参与観察)…現場における直接性、自己と切り離された対象を主観で整除
- ii 聞くこと(聞き取り)…他者が介在する間接性、他者という自己と別の主観との解釈交渉

A 見ること

→言説よりも実践

古くは、現地人が盲目的に付き従う「文化」を研究者が客観・中立的に「見る」とされていたが、この姿勢は実証主義・客観主義への懐疑と直面し、以後「観察」の限界が提唱されてきた。

「見る」ことにおいて、観察者の「目」が重要になることは明らかだが、その「目」について、

- ① 「目」が訓練的に養われるというのは余りにも軽率
- ② 「目」で見たものを「文化」と捉えるのは余りにも安直

というような問題が生じたことが、「観察」の限界が言われた理由でもある。

だが、「見る」ことそのものが否定されているのではない。新たなアプローチもある。

→観察対象を微細に設定し「身体化された文化」へ接近する

慣習化された行為の実践を当事者が習得する過程、個人が社会の中で資源を活用しつつ熟練化する過程など、当事者にとっては前意識的な領域についてそれが社会の中で形成されてゆく過程を明らかにすることはできる。(部分的な分析)

B 聞くこと

→情報の重要性

古くは、情報自体は現地人のものの見方(観念世界)として解釈されたが、記号論やテキスト分析などによる「表層→観念」という接近が現実的でないことが明らかになる。

←現地人が表層行為の意味・意図を正しく理解していることは稀であり、半ば「信仰」の段階に過ぎず、現場でなされる解釈にも矛盾や齟齬が多いため、現地人ですら理解していない観念世界をその象徴である表層行為の解釈により解明することは困難もしくは不可能である。そもそも、表層行為と観念世界のどちらが主軸となり得るかも明確でない場合が多い。

→中身のコンテクストを踏まえつつ(≡非中立的な中で)批判的な描き出しを行うことはできる。

C 見ること・聞くこと

対象の如何によって「見る」「聞く」の技法はある程度限定されるが、どちらを重要視するかは研究者自身の関心や枠組みに依存し、両者も区別されず均衡を保ちつつ複雑な現実を描き出す。

cf. 「について」「で」

「について」を問うならば、被調査者は普段考えもしなかったことをあえて考え調査者の指針に沿いながら回答する。「で」を問うならば、コンテクストを踏まえた社会の語りとなる。

4、質的調査について

質的調査…要約的・抽象的・範疇的(カテゴリーカル)ではない、具体的コンテキストに即した「厚い」「深い」記述・インタビューを伴う調査のこと

近年における質的調査の再評価は、近代科学が依拠する客観主義・実証主義に対する懐疑や、個別な学問にとどまらない全体的理解への要請に起因するものである。

「Writing Culture Shock」で問われた「表象の政治力学」、つまり、「現地に行けば分かる」という経験主義的なレトリックへの批判や、常に離脱可能な調査者の状況への問題提起に対し、果たして答えることはできるのか？

(現場にいても離脱可能な状況で物を「書く」ことは近代科学認識論と大差ないのではないか?)

A 社会調査におけるケーススタディの扱い

福武直(社会学者)の意見

「事例調査は統計調査に裏付けられない限り十分な寄与をなし得ない」

近年は量的調査と質的調査の主従関係は設定せず相補的な使用が主流である

そもそも、「量的」「質的」という二項対立そのものが近代科学認識論的という批判もあるが、

中野卓(社会学者)の意見

「具体事例は特殊であり仮に普遍的規則性があるならばどの具体事例にも表出する」

質的調査が依拠する「事例への認識」「事例の対象化」には従来の方法論を超えた異質な可能性があり、その異質性を積極的に捉えることを主張している

では、その異質性の核心にある「個人」に対し社会調査ではどのように向き合うのか？

データ…一人一人の語りや振る舞い(時に首尾一貫しない)

これらのデータは「社会構造の把握」のための一事例として扱われカテゴライズされてきた。

人類学においては、このような姿勢は 20 世紀中頃に「構造機能主義」と呼ばれ主流であった。研究の関心はあくまでも「具体的な個人を取り巻く社会関係の法則性・一般性や社会構造」であり、調査で得られたデータはその把握のためのものに過ぎなかった。しかし、1970 年代頃から静態的・個人の主体性を無視した研究に対する批判が強まり、個人の行為・思考全体(セルフ)の研究へと移行していった。この中で、調査対象のみならず、調査者自身の自己意識や、調査者と被調査者への関係性(政治力学)への注目が強まった。特に後者については、調査者が被調査者を一方的に対象化することへの批判としても表出した。

(似田貝中野論争)

似田貝の意見

「自然科学的な調査者－対象という構図そのものが実情に即していない。つまり、調査者は被調査者を前にして、自身のセルフが欠如し現場リアリティとも隔絶しているという状況が生じている。このことへの対応として、調査者－被調査者の共同行為として社会調査をデザインすべきだと考える。(ある種のアクション・リサーチである)」

中野の意見

「似田貝の主張する共同行為は、調査者－被調査者の間にある緊張感を伴う異質性を無視して

おり、むしろ『個人は一人格一思想を持つ主体でありそのような個人とのみ協同できる』とする考え方、調査者を認識論的に上位に置く考え方に基づく啓蒙主義的なモデルである。そこで、固定化したモデルではなく、異なる人間同士の異質性に向き合った流動的な交通を主張する。」

(本論)

フィールドワークに対する懐疑は、1980年代以降強まっていき、その流れの中に『Writing Culture』もあった。「政治力学」における不平等性の自覚はやがてフィールドワークの不可能性、つまり、「現場を踏む」ことで得られたリアリティはまやかしでありリアリティを確保するために恣意的に記述を行う点において民族誌は創作に過ぎない、という議論へと進んでいった。さらに拍車をかけるように『マリノフスキ日記』が出版され、これ以降「現場を踏む」というフィールドワークの存在基盤が解体され民族誌はテキスト編集の営みに還元されてゆく。恣意的な創作に過ぎない作品としての民族誌は積み重なってもやはり偏政治的であるとされた。

(エスノグラフィの製作とは、フィールドワーカーによる現場での発想・観察、その後の分析・理解・記述という一連の営みである)

同年代、カテゴリー脱構築的なポストモダン思想が流行り、反リアリズム・反経験主義の立場を徹底した結果、リアリティの議論はどこかニヒリズム的な響きを帯びた。(さすがに極端である) 今までの全体の動きの焦点は、エスノグラフィがテキスト編集かという問題まで遡る。

B エスノグラフィの脱テキストに要請される調査者－被調査者の共約可能性

民族誌の脱テキストには、調査者・被調査者のセルフ、及び両者の共約可能性に立ち戻るべき(似田貝中野論争から見えること)

似田貝…一構造的立場から別の構造的立場へのセルフの変更、両者の融合や止揚を想定

中野…両者の融合や止揚を安易に想定せず、共約可能性を残し「生活のふれあいから現実を学ぶ」→実感による差異の超越というフィールドワーク観

cf. 丸山真男「感覚や実感に依存せず徹底的な議論・分析に基づいた認識論に基づくべきだ」

以上の丸山の意見だけが正しいということはない。理知的な相互理解だけが全てではない(似田貝は理知的個人を想定したモデルであった)。このような合理性に限定しなくてもよいだろう。

柳田國男(民俗学者)

「最も微妙な心意感覚に訴えて初めて理解できるものを解明しようとする。理性偏重・感性排除という分裂を回避し両者が一体となった認識というものを構想する。」

「見ること」「聞くこと」はあくまでも近代科学主義的主体の対象に対する分析的なアプローチであるが、「理解する」ことを理性的なぶつかり合いに限定しないならば、対象との間の交通や共約可能性も「実感」という形で確保することは可能である。

5、全体論的に見るーインドネシア華人社会を通してー

A 中国人、華僑、華人

「インドネシアに華人はどれほどいるのか」→「そもそも華人とは何か」

中国人：中華民国・中華人民共和国の人…特定の国家の国民、狭い地域カテゴリーに対する認識

華僑：清末～民国初期、東南アジア定着の中国出身者に祖国支援・忠誠を呼びかける過程で定着

華人：大戦後、東南アジア各国が国民国家形成の過程で、中国系の人々の国籍について問題とな

ったが、中国本土ではなく現地に根を下ろした存在として自らを位置づける文脈で誕生

11世紀の東南アジア交易を見れば分かる通り、東南アジア港市の華人コミュニティはそもそも華人男性・現地人女性の混血社会であった。この経緯を考えると、「華人とは何か」という問いに対し明確に答えることは不可能だと分かる。また、社会環境や民族間関係、植民地などの歴史的過程が各地でそれぞれ蓄積しており、その事情も各地で異なっている。そもそも華人というカテゴリーを設定して区分すること自体が非生産的とも言える。

B インドネシアの華人の歴史

華人人口は一貫してジャワ島に集中している

そもそも始めはオランダ領東インド植民地

香料貿易の支配の中で福建系交易商人が港市に定着し混血・現地化→プラナカン

やがてプランテーション・鉱山開発などの面的支配の中で広東系の労働者が到来→トトツ

※ プラナカンは現地化しているが、トトツは出身地の文化要素が強い

植民地末期はヨーロッパ人、外来東洋人(大半は華人)、原住民の3つに住民が区分

これに沿った植民地構造化の中でプラナカンはより高い地位を求めて「強い中国」を待望、また自分たちの中に入った「原住民要素」を排除しようとするようになる

(cf. 原住民を包括するものとしてインドネシア民族=国民が構想される)

1900年のバダヴィアには中華會館が設立され、儒教を教育理念として北京官話を教育媒体とした。スタンスは「本来我々が学ぶべき是北京官話である」。ジャワ島中心に同種の学校が展開。

オランダはHCS(華人限定のヨーロッパ教育・オランダ語教育)により華人たちを繋ぎ止める

HCSは裕福な過程が多く、貧しい家庭の華人はマレー語教育主体の学校に行くようになる

(原住民は→各島の言語、ジャワ島ならジャワ語・バリ島ならバリ語など)

日本軍政期になるとヨーロッパ系の学校は閉鎖され多くの華人は中国語学校へ行くようになる

独立後も華人の多くは中国語学校を選択した

スカルノ時代…インドネシア国籍者が外国系学校に入ることを禁止、外国語教育媒体への規制

スハルト時代…共産主義の根源を中国に見、中国語学校を含む外国系学校を禁止・閉鎖

中国語での報道・出版・印刷物への規制、公的空間からの中国語消滅

スハルト崩壊後…中国語教室の事実上黙認、反華人政策の見直し、中国語全面解禁など

C 津田のフィールドワーク地ールンバン県ーをたどる

ルンバンでも中国語教育の学校が設立され上のような歴史をたどってきた

例) 北京官話(マンダリン)の先生と中国語教室

(具体例は省くが) 華人の再中国化・再華人化、もしくは、同好会的な学び

※ 同好会…一時的興味から湧き立つがやがて下火になったり消滅したりする位置付けのもの

a この中国語教室はもしかすると「同好会的」なものにすぎないのではないか？

b いやでも、「華人らしさ」の回復とも言えるのではないか？

a の補足…実際ルンバンの中国語教室は下火になった

b の補足…中国観光、「ご先祖様を見るために」

→もちろん言葉じりだけを取って判断することはさすがに軽率なのは明らかだが

華人としての意識はあるが(「華人か」と聞かれれば「華人だ」とは答えるが)、中国語・中国の土地は繋がりを多少感じていても所詮馴染みのないもの(もはや「異文化」に他ならない)

もちろん、ルンバンという一例でしかなく、単純な一般化は不可能

そこにどのような現象が起こっているのか、それはなぜなのか、それを「彼ら」の特定の文脈の中で全体論的に見ることの重要性を改めて考えて見ることも必要であろう。

以上